

小郡市 人権センター 通信

Vol.
32

Contents 「主な内容」

- 人権センター公開講座のお知らせ・・・P 1
- 多様性社会の実現に向けて・・・P 2

『私』からはじめる『私たち』の多様性社会



日時 10月4日(金) 19:30~21:00

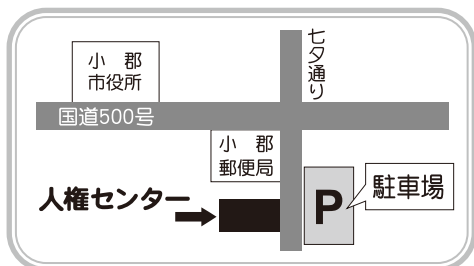
会場 小郡市人権教育啓発センター
大集会室

講師 三木 幸美さん
(とよなか国際交流協会 職員)

プロフィール

- フィリピンと日本のダブルとして大阪市内の被差別部落に生まれ、現在28歳
- とよなか国際交流協会職員として、外国にルーツをもつ子どもの活動を支援している
- 自身も外国にルーツをもつ者、また被差別部落に生まれ育った者として体験したことや考えてきたことを各地での講演や執筆活動で発信を続けている

子どもや若者の中には自分のルーツをあまり話したくないという子もいます。でもそれはその子の問題ではなく、これまでの「ちがいを」「まちがいを」とされる経験から生まれた社会に対する答えです。その子たちにもっと強くなれと言うのは、違うのではないのでしょうか。さまざまな文化・ルーツをもちながら多くの人々が生きるこの社会で、だれもが自分らしく生きるにはどうすればいいのか、ということについて一緒に考えてみませんか。



入場
無料

手話通訳
あり

託児あり
9/26(木)までに要申込

【問い合わせ・託児申込先】

小郡市人権教育啓発センター TEL0942-80-1080

多様性社会の実現に向けて



日本で暮らす外国人は近年急激に増えて、273万人を超えました。これは日本の人口の約2%です。さらに、帰化した人や、両親のどちらかが外国人で日本国籍の子どもも含めれば、およそ400万人が日本以外の国や地域にルーツをもっているといわれます。また、2019年4月から始まった外国人労働者の受け入れを拡大する新たな制度により、今後さらに多くの外国にルーツをもつ人々が日本で暮らし始めます。しかし、その暮らしを支える体制が十分に整っているとは言いがたいのが現状です。

22年前にペルー人の両親とともに来日した方は、「単なる『労働力』としてではなく社会を支える『同じ人間』として接してほしい。そのための生活支援や日本語教育にも、力を入れてほしいと思います。また、これからは全国どここの学校にも、外国にルーツをもつ子どもがいる時代になります。どんな子どもにとっても居心地のいい教室ができてほしい。」と話しています。

取組みの紹介



外国にルーツをもつ人々を支援する取組みを進めている事例を紹介いたします。

これは、東京都港区の区立六本木中学校が保護者に配布した運動会のお知らせです。時候の挨拶や「ますますご清栄のこととお喜び」といった決まり文句は入っていません。また、文章は簡潔にわかりやすく、漢字にはルビをふっています。約2割の生徒たちが外国にルーツをもつ子どもたちということもあり、その保護者への案内文書を、その方たちが読みやすい日本語で作成する取組みを行っているのです。でも、よく考えてみると、この取組みは日本語に慣れ親しんだ人にとっても必要な情報のみが書いてあり、わかりやすい文章だと思えます。このように、誰かの不便さを解消するためにしたことが全ての人にとって有意義なものになることは他にも沢山あるのではないのでしょうか。

運動会のお知らせ

運動会を次のとおり行うので
見に来てください。

日時 2018年6月9日
(土曜日) 午前9時から
場所 六本木中学校の校庭
その他 6月9日に
給食はありません。
弁当をもってきて
ください。

心の壁を取り払う

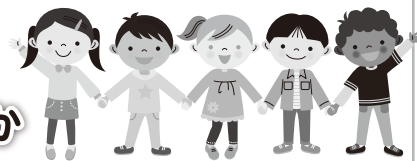


小郡市でも2019年、6月末現在、約1000人の外国人の方たちが生まれた国を離れ、勉学や仕事をしながら暮らしています。そのような社会の中、私たちは、外国人を「外国人だから…」と固定化した見方をしてはいないでしょうか。お互いの様々な違いにとらわれてはいないでしょうか。日本社会の中にも、多様な文化や言葉があり、人々の暮らしぶりは様々です。「心の壁」を取り払い、多様な価値観が認められる社会、皆が生き生きと暮らせる社会について考えてみませんか。



人権センター新刊紹介

ふるさとって呼んでもいいですか ～6歳で「移民」になった私の物語～



6歳で来日し、言葉や習慣、制度の壁など数々の逆境の下でも、周囲の援助と家族の絆に支えられ生きてきたイラン人少女ナディ。移民社会化する日本で、異文化ルーツの子どもたちが直面するリアルを等身大で語った貴重な手記。